編者はしがき

本巻は、前巻からの「耶蘇伝」が完結し、続いて「釈迦と維摩詰」の第二幕一場までが収録されている。

「耶蘇伝」は、イエス・キリストがヨハネから洗礼を受け、磔にされるまでが描かれているが、この戯曲の最大の特徴はイエスは十字架にかからず、十字架にかかったのはイエスを裏切ったユダであったという終幕部分にある。

この結末について本書「はしがき」で谷口雅春先生はこう述べておられる。

「イエスが十字架にかかったということは、不合理であって、それは妄想が描いた幻化の所産であるとするのである。純粋な創作ではあるが、言々真理を語る。教えを知らない人はそのつもりで味わいながら読んでもらうと、得るところが多いと思う。イエスの言葉は創作であるとはいえことごとく聖書に典拠を得たものであり、ただ、イエスが十字架にかからないで永遠のキリストとして生き通すことに真理をいっそう明晰にしたのである。」（「はしがき」より）

イエスが真理を語ることは当然であるが、谷口雅春先生は悪魔にもユダにも真理を語らせる。

「**イエス**――私は神の子だ、私自身は苦しまない。私が苦しんでいるように見えるのは、すべての人類の心が映るのだ。人類の兄弟悩むが故に私は悩むのだ。私がこの苦しみを十字架につけてしまったときに人類全体の苦悩は消えてしまうのだ。私はこの苦しみを十字架に釘けるために祈り切らねばならないのだ。」（三〇頁）

「**ユダ**――私は先生にはじめて会ったときに救われたと思った。本当に私は先生に救われたと思ったのです。（眼に泪ぐむ）先生と同時代に生れさせて頂けたことが有りが

たいと思ったのです。この人のためになら、生命を捨てて好いと思いましたのです。先生は私に人間は皆『神の子』だと教えて下さいました。苦行しなくとも、どうしなくとも、すべての人間が神の子であるという福音を聞いたときに、私は躍り立つ思いで、洗礼ヨハネの弟子であることを止めて、早速、先生の仲間に入れて頂いたのです。ああ、全ての人間が神の子である！　何という素晴しい真理でしょう。」（三三～三四頁）

「悪魔――洗礼ヨハネは善に執われ、ユダは慾に執われたから、ここまで破滅させてやったものの、イエスと来ては悪には勿論、善にも慾にも執われず、悠久生き通しの生命を悟って肉体は本来無いと少しも執着するところがなく、ユダの罪の身代りになってやろうなどと殊勝な心を起しなさるものだから、法爾自然に生命を捨つる者が却って生命を得る喩えの通り、きわどい所でとんだ頓珍漢を演じてしまってこの有様。イエスの代りに、生命の惜しいユダの方が捕えられて、この俺が折角企んでおいた歴史にも、ちょっとばかり狂いが出来たわけだ。折角俺が仕組んでおいた歴史だから、

表面だけでもイエスが捕えられて磔刑になったということにしておかねばならない。」（六六～六七頁）

この戯曲全篇にわたって、どの登場人物にも真理を語らせながら、それぞれが「心の法則」によって各自の運命に突き進んでゆく。ここに各自の運命の交錯が演じる文学としてのドラマ性が生まれてゆく。

この戯曲の結末は、イエスが磔刑に処されたとされる歴史的事実とは異なる。これには谷口雅春先生の強い真理への確信が働いていると思われる。イエスほどに真理を体得している聖者にして人々へ真理を宣べ伝えた偉大なキリスト教の開祖が非業の死を遂げるはずはない。仏教の始祖・釈迦は自然死であった如く、イエスもまたそれにふさわしい死を迎えるはずである。各登場人物の運命は「心の法則」によって定められるはずである。その谷口雅春先生のご確信によって、最後の結末は史実とは劇的に変えられている。

この戯曲は、終幕において、ユダがイエスと間違えられてローマの官憲に捕えられ

る。イエスは必死にユダの身代わりになろうとするが弟子達に阻まれる。捕えられたユダははじめは必死に抵抗し自分はイエスではないと言い張る。しかし、ここに悪魔の唆しがあらわれる。その唆しによって、盗みを働いて死刑にされるよりは自らをイエスに扮して「万人の罪の身代わりになること」を選び、イエス・キリストとなって十字架にかかることを決心する。こうしてユダは「心の法則」に従って自らの運命を決していく。

以上の経緯はぜひ本篇を通して終幕まで通読して頂きたい。谷口雅春先生のイエス・キリストへの尊崇の思いと真理への確信がこの劇中に溢れ、史実をも変えて真理を世に広めんとの谷口雅春先生の真意を汲み取って頂ければ幸いである。

この「耶蘇伝」は、昭和十一年に『生命の藝術』誌に掲載され、昭和十二年に、日比谷公会堂で上演されている。また、昭和二十七年には『生命の實相』に「宗教戯曲篇」として組み込まれた。昭和二十八年には『イエスは十字架にかからず』と題されて単行本化もされてもいる。

是非とも、真理の書であり文学作品でもある本書を味読して頂ければ、イエス・キリストが如何なる真理を説き、如何なる布教活動をし、自分を裏切る弟子さえも愛し続け救わんとしてきたかがよく理解できると思われる。本篇を十分に味わってくだされば幸いである。

令和四年七月吉日

谷口雅春著作編纂委員会